

虹

学校から逃げ出したら

⑮ 新人学芸員 心癒やした美術館に

企画展の準備をする金山さん
＝県水墨美術館

常設展は美術館が持つコレクションを紹介する。人気の作品や時流を捉えたテーマが軸となる企画展に比べれば、どうしても地味な印象がある。一方で、その美術館の持ち味や魅力が凝縮されている。

県水墨美術館の常設展示室はこじんまりとしているけれど、花鳥風月を題材にした作品で日本の伝統美を伝える。今は冬から春へと移り変わる兆しを感じさせる作品を飾る。湿り気たっぷりの雪が枝をしならせる様子を描いた日本画や、梅の木の周りで2羽のキジが遊ぶ屏風絵が目を引く。

この美術館で常設展を担当するのが、昨年4月に入ったばかりの新人学芸員、金山さん(23)。毎回季節や企画展との取り合わせを意識しつつ、展示作品を決める。「自分が選んだ作品を出せるって幸せですよ」とやりがいを語る。

美術は心を動かす。慰めを与える。金山さんも心を癒されてきた。最初に美術にほれ込んだのは、職場の県水墨美術館だった。



初めての美術館の記憶は小学生の頃にさかのぼる。授業の一環で地元入善町の「下山芸術の森 発電所美術館」を訪れた。水力発電所だった空間を生かし、全国的に知られる美術館だ。金山さんが目にしたのは、医療用のベッドがいくつも吊るされ、天井から水が降るといふ奇抜なものだった。日本を代表する美術家の手による意欲作だ。

今なら「すごいものを見てしまった」と感動するはず。前衛的な表現を発信する美術館が地元にあることを、誇らしくも感じただろう。しかし、当時は10歳程度。知識も関心もない。たじろぐばかりだった。「想像していたのと違う」と遠くに感じた。

次に美術館に行ったのは高校1年生だった。中国から高校生がホームステイに来ることになった。日本らしいところに連れていこうと、事前に県水墨美術館を下見した。源氏物語に関連した企画展が開催中だった。ガラスケースの中の絵巻は緻密で色彩豊かではあるけれど、どこかとつきにくい。そもそも源氏物語をきちんと説明できない。結局、郊外のショッピングセンターとますのすしミュージアムに行った。



10代の心は繊細で複雑だ。高校2年になると、学校を息苦しく感じるようになった。進学校だから、教師は受験勉強に集中する

よう急ぎ立てる。勉強ができる同級生たちは意識が高く、未来にまっしぐらに進もうとする。学校全体で体育大会がやたらと盛り上がるのにも違和感があった。自分はどこかふわふわして、場違いに感じた。

行事だったか、授業だったか。もう記憶にない。ある日の午後、学校をとにかくサボりたくなった。廊下に雪舟展のポスターが貼ってある。雪舟の存在は知っているが、その作品が富山に来ているとは意外だった。美術館は高校から歩いていける距離にある。誰にも言わず教室を抜け出した。

県水墨美術館に着いた。室町時代に活躍した雪舟が描いた屏風の大作を中心に、その流れをくむ絵師たちの作品が並んでいた。たまたま学芸員のギャラリートークの最中だった。中国から輸入された水墨画が、日本独自の表現を獲得するまでの道りを解説していた。耳を傾けていると、ガラス



「正美」 広田 世

の向こうにある古めかしい作品が生き生きと浮かび上がって見えた。「美術、いいじゃん」と思った。学校で感じていたストレスからも一瞬だけ解放された気がした。

それからは、新しい企画展があるごとに美術館に足を運んだ。展示替えがあれば、同じ美術展でも行った。学校で窒息しそうになっても、展示室の空気を吸うと生き返った気になれる。学校からの道中ではギャラリートークの有無を携帯電話で尋ねた。プロの解説を聞いた方が美術展は楽しい。

ある日、展示室で学芸員に声をかけられた。さっきまでギャラリートークでマイクを握っていた女性だった。たまたま居合わせた新聞記者に感想を尋ねられていたところだった。「真剣に聞いてくれてありがと

う」と感謝された。大人の来場者が多い美術館の中で制服姿が目立っていたらしい。照れくさかったけれど、うれしかった。

声をかけたのは学芸課長の桐井さん(50)。「美術館は基本的に大人の場所。そこに若い人が来てくれると、私たちは喜んでしまいます。他にも楽しい場所があるのに来てくれたんだから」と話す。

いつしか金山さんにとって学芸員は憧れの存在になった。1時間近くも退屈させずに絵画の魅力を説明する話術と知識に目を見張った。でも「自分には無理だろう」とも思った。学校が嫌いだから、勉強に身が入らない。数学にも生物の教科にも意味を見出せず、受験勉強をしたくない。大学に行かなければ資格は取れない。でも学芸員にならなくても、監視や清掃など美術のそばにいられる仕事は他にもある。

しかし、やはり親は「大学くらい行った

も強制されない勉強は面白い。入学前から目当てにしていた教授が辞めると、別の大学に行こうかとも思い詰めた。それくらい勉強が好きになっていた。

大学生活の中で美術展には1000回近く行った。外国の美術館も行った。アルバイトして稼いだお金のほとんどをつぎ込んだ。

大学院進学へ向けて、勉強に打ち込んでいた矢先に県水墨美術館が学芸員を募集していると聞いた。学芸員の仕事の口は決して多くない。一度逃せば、次の募集がいつあるか分からない。ましてや自分が美術を好きになった大切な美術館だ。

準備期間がほとんどない中で応募した。筆記試験の勉強も十分ではなかった。面接試験では「脚立に上れますか」と聞かれた。高いところは苦手だが、「大丈夫です」と言い切った。嘘ではない。どんなに怖くても、いざとなったらやる。



たった1人の採用枠に合格した。信じられなかった。「高校が好きだったら美術館に行っていなかったかもしれない。高校が嫌いだったから学芸員になれた」と思った。

1月には氷見市出身の作家の企画展を担当した。常設展示室には、その父の作品を飾る立体的な仕掛けもした。新人とはいえ、常設展担当者としては腕の見せどころだ。

憧れていたギャラリートークもやった。作家が作品に込めた思いや狙いを話した。「イタコになったつもりで」マイクを握った。来場者が最初から最後まで自分の話を聞いてくれたことに感激した。憧れていた仕事に就いたのだと改めて実感した。

SNSでの発信も金山さんの仕事だ。今の高校生にとって電話をかけることはハードルが高い。だからネットでの情報発信を大切にする。少しでも柔らかい印象にしようと、絵文字を付けている。「かつての私のように美術館を必要としている10代に届けたい」。願いを込めて投稿している。

学芸員になってちょうど1年。あっという間の1年だった。覚えることも、挑戦したいことも、まだまだたくさんある。

県水墨美術館の館長、中川美彩緒さんが3月31日に退任しました。教育普及を中心に活躍し、女性としては県内の公立美術館のトップに初めて就任した人物です。実は金山さんが初めて県水墨美術館で聞いたギャラリートークも中川さんによるものでした。文化を守り、育てる仕事への情熱はしっかりと託されました。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたまをエピソードや、この紙面についてのご意見・感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は5月1日(日)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局